動詞について ⑦

天理大学非常勤講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

○いりこむ／いれる

「おふでさき」では、「いる」は主に「要る」という意味で用いられており、「入る」は「入り込む」というかたちで用いられている。そこで、今回は、他動詞「入れる」に対して、自動詞「入り込む」を対応させて考えていきたい。

まず、「入りこむ（入こむ）」に付属する助詞に注目して、その動作のあり方を見ていく。格助詞「が」に着目すると、入り込む主体は、「神が」（二号 36）、「をやが」（十四号 71、76、十五号 60、61）と述べられて、また助詞「が」は付いていないが、「月日」が動作主体として示されており（六号 45、八号 50、十号 5、十一号 22、十一号 54）、「入り込む」主体の第一は親神であることが分かる。例外としては、「とふぢんが」（二号 32）がある。

次に、助詞「へ」を見ると、そうした入り込む先としては、「たいないへ」（十一号 22）と示されており、「へ」は付いていないが、「たいない」（二号 36、六号 45、八号 50、十号 5、十一号 54、十二号 74、十四号 76）へと入り込む場合が多い。七号 37 や十号 74 では「たいないよりも入こんで」と「よりも」が用いられてもいる。また、同じ親神を動作主体として、十四号 71 では「をや」が「めゑめに」入り込み、十五号 60 では「よふぼくにてハ」入り込むと表現されており、あるいは「山なかのみづのなかい（へ）と入こんで」（二号 27）とも歌われている。その他、「とふじんが」の場合には「にほんのぢいゝ入こんで」（二号 32）と記されている。

さて、親神が「たいない」へ入り込む場合、それは誰の「たいない」であろうか。『学習』によれば、三つの場合がある。すなわち、（1）教祖に入り込む場合（六号 45、八号 50）、（2）「よふぼく」（にほんの者）に入り込む場合（十号 74）、（3）「とふじん」（教えの真意を解さない者）に入り込む場合（二号 36、十号 5、十二号 74）である。これに加えて、十一号 54 と十四号 71、76 は、「よふぼく」や「とふじん」を含めた人々一般として捉えられよう。ただし、十号 74 に関しては、『おふでさきを学習する』と『おふでさき通訳』が「よふぼく」の「たいない」と捉えているのに対して、『おふでさき講義』『おふでさき通解』『おふでさき拝読入門』『おふでさき注釈』は、教祖の「たいない」と解している。また、七号 37 に関しては、『講義』『通解』『通訳』『拝読』は、「をびやたすけ」の場面に限定して「胎内に」入り込むと捉えているが、『学習』は一般的な意味でそれぞれの身の内に入り込む可能性もあるとして両義的に解している。

それぞれの文脈に即して見ていくと、まず、（1）教祖に入り込む場合。六号 45 ではいわゆる「元初まりの話」の文脈で歌われており、「このものに月日たいない入こんで」と、人間創造における母親の役割を担う「このもの」（教祖）の「たいない」（胎内）に入り込むと歌われている。また、八号 50 では、「月日たいない入こんではなしするのハいまはじめやで」として、神の「やしろ」である教祖の口を通して親神の思召を伝えるという文脈で、親神が「たいない」（体内）に入り込むと述べられている。

次に、（2）「よふぼく」の場合。「月日よりたいないよりも入こんで／ぢうよぢざいのさしずしよこや」（十号 74）に関して、先にも述べたように、この箇所を教祖の「たいない」と解して、啓示の文脈で捉えられる解釈もある。それに対して、『学習』や『通訳』は、この箇所を布教伝道という場面として捉え、「たいない」を広く「よふぼく」のものとして解釈している。すなわち、『学習』は、「おやさまが直接にお話しになるというよりも、取次に仕込まれた布教者が世界・人間の元を取り次ぐ場で自由自在の指図（話）をするところ、そこに神のはたらきが分かるので、それが証拠となる、の意であろう」（316 頁）と説明し、また、『通訳』も「布教伝道の実際に当って、親神が布教伝道者（「にほんの者」）に入込んで、何を言ったらよいか、何をしたらよいか、みな指図して下さることを言っておられるのである」（395 頁）と述べている。こうした解釈は、十五号 60、61 で、「たいない」という言葉は直接的にはないものの、親神が「よふぼく」に入り込むことが明示されていることとも関連するであろう。そこでは、「よふぼく」にこの世を創めた「をや」が入り込めば「どんな事をばするやしれんで」（61）と歌われている。

そして、教えの真意を解さない者に入り込む場合。二号 36 では、神が「たいない」に入り込んで「心すみやかわけてみせる」と歌われて、「心」を「分ける／分からせる」という働きが示されている。また、十号 5 の文脈では、「から」や「てんぢく」の心が主題にされて、その心を「すます」為に、親神が「あっちこっち」と「とびでて」、さらに「たいない」に入り込んで「ぢうよぢざい」（自由自在）の働きを見せて、その結果、「から」であっても「にほんのもの」に敵わないようになると歌われている。また、十二号 74 では、親神が「たいない」に入り込んで胸の掃除に取り掛かると述べられ、続く 75 で、このことが「高いところでみなあらわす」と歌われている。こうして、「から」「てんぢく」あるいは「高いところ」などと表現されるような者に対して、親神がその「たいない」に入り込むのは、その者たちの心を澄まして、親神の心を分からせることにあるといえる。

なお、人間一般の「たいない」と考えられる箇所もある。十一号では、今までと心をしっかりと入れ替えて陽気づくめの心になるように（53）と歌われたあとに、その心がどうしてなるかといえば、「月日たいない入こんだなら」（54）と説かれている。また、十四号では、各々に何も言わないでも、親神が入り込んで言わしめる（71）ことが歌われているが、このことを『通解』は、「自分では何も言う気がなくても、身上などを通して心づかいを振り返り、見つめ直させて、言わずにおれないようにする」（510 頁）と説明し、また『通訳』は、先人から伝わる布教方法を引き合いに出して、「自分のたすけられたときの話をすれば、聞いている者が自らさんげすると言われ、これは初期より現在に至るまでの、最も基本的な布教法である」（577 頁）と述べている。

また、同じ十四号の少し先の箇所に、口先でどれほど真実を言っても聞き分けがないので、親神が「たいない」に入り込んで、「とんな事をばするやしれんで」（76）、「とのよふなせつない事がありてもな／やまいでわないをやのさねんや」（77）と歌われている。ここでは、親神の「たいない」での働きの現れが病として表現されている。